

氏名（本籍）	岩村 真樹（大阪府）
学位の種類	博士（健康科学）
学位記番号	甲第 18 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 15 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項 該当
論文題目	A cross-sectional study of the association between dynapenia and higher-level functional capacity in daily living in community-dwelling older adults in Japan (ダイナペニアと地域在住高齢者の生活機能との関連性)
論文審査委員	主査 教授 今北 英高 副査 教授 峯松 亮 副査 准教授 高取 克彦

学位論文の要旨

【背景】

日本は現在高齢社会といわれており、高齢者の「健康寿命の延伸」と「健康格差の縮小」を行うことで膨らみ続ける社会保障費用を抑制し、医療や介護を必要とする高齢者数を少しでも減らすことが喫緊の課題である。そのためには、加齢に伴う退行性変化を早期から把握し、予防的介入を行うことが重要となる。近年加齢に伴う退行性変化としてサルコペニアやフレイル、ダイナペニアという概念が注目されており、サルコペニア、フレイル、ダイナペニアのそれぞれが身体機能や手段的日常生活動作能力と関連性を有するという報告が散見される。しかし、これら 3 つの概念を同時に手段的日常生活動作能力と比較した報告はなく、3 つの概念と手段的日常生活動作能力の関連性は明らかになっていない。

【目的】

本研究は身体機能とより強い関連性を持つとされるダイナペニアがサルコペニアやフレイルよりも手段的日常生活動作能力と強い関連性を持つとの仮説をたて、ダイナペニア・サルコペニア・フレイルと手段的日常生活動作能力との関連性を検証することを目的とした。

【方法】

日常生活が自立しており、要介護認定を受けていない地域在住高齢者 123 名（男性 31

名、女性 92 名、年齢 75.3±5.3 歳) を対象とした。身体機能測定として筋肉量、握力、歩行速度、等尺性膝伸展筋力、片脚立位保持時間測定を実施した。また質問紙調査として老研式活動能力指標、疲労感と活動量についての調査を実施した。サルコペニア判定には Asia Working Group for Sarcopenia の定義、ダイナペニア判定には Manini らの定義、フレイル判定には Fried らの定義をそれぞれ用いた。

【結果】

ダイナペニアの有無はサルコペニアの有無とフレイルの有無とそれぞれ関連性を有した。また、サルコペニアとフレイルのダイナペニアに対する感度はサルコペニアが 33%、フレイルが 17%であった。ダイナペニアとサルコペニアとフレイルの 3 判定の中で老研式活動能力指標に対する独立した関連因子として抽出されたのはダイナペニアのみであった。

【結論】

要介護認定を受けておらず日常生活が自立している地域在住高齢者において、サルコペニアとフレイルのダイナペニアに対する感度は 33%、17%と低くなっており、サルコペニアやフレイルと判定された対象者以外にもダイナペニアを有する対象者が多く存在した。また、ダイナペニアはサルコペニアやフレイルよりも手段的日常生活動作能力に関連した因子であり、介護予防における高齢者の身体機能評価において特に重要な評価項目であると考えられた。